

# Culture Review



図1 チェ・ピョンス《韓烈(ハニヨル)を救い出せ》1987年  
延世大学学生会館前(チョン・テウォン撮影:ロイター) 李韓烈記念館冊子より

昨年十一月、晩秋のソウルを訪れた。パク・クネ退陣を求める集会や、広場で寝泊まりするアーティストたちの活動やパフォーマンスを見る傍ら、新村駅近くのイ・ハニヨル(李韓烈)記念館に立ち寄ってみた。

イ・ハニヨルとは、今から三〇年前(一九八七年)の民主化を求めるデモの最中に催涙弾の直撃を受け、亡くなった延

世大学の学生である(一九六六〜一九八七)。同年、取り調べ中に水拷問で殺されたソウル大学生、パク・ジョン Chol(朴鍾哲)とともに、大統領の直接選挙制改憲を中心とした六月民主抗争で犠牲となった「烈士」として知られている。イ・ハニヨルの葬儀にはソウルだけでも一〇〇万人が参加したと言われ、彼が催涙弾を受け倒れる場面を

column

アート・アクティヴィズム83  
「会いたい顔」展  
——ソウル、李韓烈イ・ハニヨル記念館

北原恵



図2 イ・ハニョル記念館、建物外観

描いたチェ・ビヨンスの《韓烈を救い出せ》のような、記念碑的な作品が作られた(図1)。

二〇〇五年にオープンしたイ・ハニョル記念館では、倒れた時に彼の着ていた服や運動靴、文章、写真などの遺品や資料、絵画が展示されている(図2・3)。この記念館は、イ・ハニョルの母が国家から受け取った賠償金と市民の寄付によって設立された。

私が訪問した時、三階では、企画展「会いたい顔」展を開催していた。扉が閉まっていたので、一階の裏にある事務所に行き、鍵を開けてもらう。ちょうどスタッフが集まっていて、前

回訪問した時にもお会いした学芸員のAさんに展示を説明していただくことができた。

「会いたい顔」展は、二〇一五年から始まった連続企画展だ。今回は、民主化運動をたたかった六名の人生について、六名のアーティストが、絵画、陶芸、インスタレーションなどの作品に仕上げた。展示室では、自身の制作について語るアーティストたちのインタビュー・ビデオが流され、アーティストの語りや作品を通して六名の人生をより身近に感じることができる。

選ばれた六名は、キム・ユン、ホン・ソンヨブ、キム・ヨンミ、



図3 イ・ハニョルの遺品展示、2016年(1)以外全て筆者撮影

ムンス僧侶、カン・ミンホ、クオン・ヒチヨンという、一九五〇年代から一九七〇年代生まれの韓国人だ。でも、私の知っている名前は一人もいない。学芸員のAさんによれば、現代の韓国の若者にもこれらの人びとの名前はほとんど知られておらず、

民主化運動に関わった無名の人びとの歴史を掘り起こし、記憶を紡ぐことが目的だと言う。過去の事績を列挙し有名な「烈士」だけを展示するのではなく、忘れ去られた人びとを呼び起こし歴史を現在に繋ぐ主眼は、選ばれた六名のうち半数の三名が女性だという展覧会構成や運営

スタッフのジェンダー比にも表れているように思う(アーティストは二名が女性)。「たとえば、ここにあるイ・ハニョルの子ども向け伝記を見ても、民主化運動やデモのシーンは男性ばかりでしょ。でも、当時の映像を見ると女性が結構参加している。私たちは、こういう男性中心の民主化運動のイメージも変えたかった」(Aさん)

Aさんが展示中の蠟燭に火をつけてくれた。展示室の空気が蠟燭の灯で一気に引き締まる。キム・ユン(一九五三〜二〇〇四)を追悼する作品である(図4)。一九七四年の民青学連事件で逮捕されたキム・ユンは、ソウル西大門拘置所から出獄するとき、母親の手作りの韓服を着て出獄して、当時話題になったそう。鉄の扉を開けて笑顔で出てくるチマ・チョゴリ姿の若い女性が写った写真がそれである(図5)。アーティ



図5 ソウルの西大門刑務所を出獄するキム・ユン、写真：1975年

図4 イ・ソン《あなたは私たちの今日、そして未来》 2016年 インスタレーション



ストのイ・ソは、韓服を着たキム・ユンと、母キム・ハンリムの姿を蠟燭に象り、制作の過程を綴った日記を傍らに置いた。その後、キム・ユンは、女性の農民運動家として活動を続け、二〇〇四年に持病で亡くなった。キム・ユンと同じ年に生まれたホン・ソンヨプ（一九五三〜二〇〇五）は、集会が許されない戒厳令下の一九七九年、ソウルのYMCAで戒厳軍と統一主



図6 チョン・ジンギョン《ゆらゆらと案内する》2016年、アクリル

体国民会議を批判するため、架空の花嫁「民主子」との結婚式を偽装し、自ら新郎となって集会を開いた人物（偽装結婚事件）。キム・ヨンミ（一九六一〜二〇一一）は、一九八五年、教師を辞めさせられたあと、焼却場反対運動などの地域運動に尽くし、最近、癌で亡くなった女性である。画面中央で剣を振りかざした僧侶と獅子の油彩画は、二〇一〇年、四大河川事業

の中止、不正腐敗の清算などを求めて焼身自殺した曹洞宗修道僧、ムンス僧侶（一九六三〜二〇一〇）を描いている。Aさんが好きだというのは、チョン・ジンギョンの作品。彼女は、カン・ミンホ（一九六六〜一九九〇）という若者を上半身汗だくの姿で描いた。従来の定型的な「労働者」や「烈士」のイメージとは異なる（図6）。カン・ミンホは、劣悪な労働環



図7 チェ・ヨンテック《4月》2016年、インスタイルレーション

境を改善するため、労働現場に飛び込んでわずか八日後、電線を作る作業中に機械に巻き込まれて死亡した阪神大学の学生だった。その後、労働災害死亡事件として遺族たちと労働団体は会社と交渉して認めさせた。

クオン・ヒチョンは、一九九六年、誠信女子大で授業料値上げに反対して籠城、断食をして、二三歳で死亡した女性である（一九七三〜一九九六）。チェ・ヨンテックは、空のコップと皿を

彼女の肖像画の周りに並べる作品を制作したが、あまりに悩んだため完成時には体重が激減していたそうだ（図7）。

このように関わったたかきも亡くなった状況も時代も様々である。必ずしも「闘争中に犠牲になった」人物だけではない人選にも意外な気がした。国家によるコモレイションが「犠牲者」の選別を行い、ナシヨナル・アイデンティティの再構築



図8 イ・ハニョル記念館「会いたい顔」展覧会図録表紙、2016年

の装置であることは、民主化運動の記念碑や追悼空間をめぐっても共通すると指摘されて久しい。イ・ハニョル記念館も決してその枠組みから完全に自由になることはないだろう。だが、

どのような展示ができるのか。Aさんたちは、「会いたい顔」展で現代アートを通じて、その可能性を探っているように思われた。記念館を出ようとしていたとき、たった今、刷り上がったばかりだという展覧会図録を

手渡してくださった（図版8）。展覧会のオープニングの写真まで含めた一〇〇ページにも及ぶ図録は、六人の人生と経験、アーティスト、観客の声の響きあう冊子となっていた。

「きたはらめぐみ…戦時下の視覚文化と社会について」研究中、主な著作に『アート・アクティヴィズム』『攪乱分子@境界』ともにインパクト出版会、編著に『アジアの女性身体はいかに描かれたか』（青弓社）など。」